

はじめに

本冊子に収録された諸講演は、寿岳文章を中心にして放射された、寿岳家の文化の同心円を描いている。つとに寿岳ご夫妻は『寿岳文章・しづ著作集』全6巻で夫婦を個としたわが国では珍しい文化現象を表していたが、さらに長女、長男というふたつの核が加わり、まぶしいばかりの乱反射を繰り返し、家族という単位でもって新しい文化的な展開をみせ、その軌跡は今日でも人々の脳裏にきざまれ、また心奥に深く宿っている。

歴史的な視座で鑑みれば、向日という田園都市の発展は、その理想とした形態を寿岳家にみるのは何ら不自然ではない。おそらく今後将来、学際的なかたちでこの家族の幅広い業績について多角的に追究されていくであろう。本書の読者は、現にその一端が早くもここに検討されているのを知るにちがいない。

寿岳文章一家の業績を家族という核でとらえた俊敏な批評家は鶴見俊輔であったが、同じ向日の地に居住していたひとりのデザイナー、中村隆一存在を忘れてはならない。鶴見氏が論述のかたちで寿岳家を描いたのに対し、中村先生は一家の業績を研究するところから対象に迫ろうとした。何度も率先して講演会を開き、専門の講師を招聘し、文化的な意義を広く社会に説いた功績は忘れてはならないであろう。

「寿岳文章一家の文化的業績についての調査研究会」という組織を起こされ、寿岳家が発信する文化的な意義を説かれた提唱者であり会長をつとめた中村隆一先生は、自らが先鋭的なインテリア・デザイナーであり、1973年には「ヤマギワ国際照明器具デザインコンペ」で特選を受賞されている。こうした工芸的な眼は、寿岳家が暮らした向日庵の建築的な意義にいち早く着目され、その保存を声高く叫ばれた。同時に先生は京都市立芸術大学名誉教授であられ、後進の育成にも力をそそがれた。また景観問題に対しても一家言をもつ警世家でもあった。ここまで先生の人物像、業績を重ねていくと、おのずと寿岳先生と相似形を描いていることに誰しもが気づくであろう。人が人を知るとはこのことである。「向日の賢人を埋もれたままにさせてはならない」とは、中村先生の名言であるが、これはまた文化の重要性を示唆した提言であるのは言を俟たない。そして、この提言のもと、神脇美千子氏、長尾史子氏、安野洋子氏といった同志が集結し、会は発足したのである。

本冊子に目を落とされる読者は、寿岳家の人々が発する文化的なメッセージについて思いを凝らされ、それらが今日性の問題をもはらんでいることに気がつかれるであろう。そうした思いを共有できればと私たちは、「向日庵」保存の新しい一步を踏み出したのである。

葉桜が揺れる春の日

特定非営利活動法人向日庵 理事長 中島俊郎